

現代短歌の中の地球科学

～名所編～

雷の音雲のなかにてとどろきをり殺生石に
あゆみ近づく 太田水穂「鷺嶋」

硫黄華の黄の石礫が荒涼と対き合ふ
殺生石をめぐるて 生方たつ糸「紋章の詩」

旅人がいでゆのいづる山かげとしるせる
ここは殺生石ぞ 島田修二「東国黄昏」

「石の俗称辞典(加藤・遠藤著)」によると、ここで詠われている殺生石は栃木県那須湯本温泉の湯川の奥の硫黄が湧出する河原に位置する黒色の輝石安山岩を指します。この名は付近に噴出する硫化水素などの有毒ガスによって動物が死ぬことからつきました。九尾の狐が死んで石となり近づくものを毒気で殺したという伝説が、物語、絵巻、能、歌舞伎などで取り上げられて広く知られるようになったそうです。この石の傍らに芭蕉の「石の香や夏草赤く露あつし」という句碑があるそうです。実は、このような場所は各地にあって、我が国最大規模の殺生石は秋田県田沢湖町玉川温泉の八幡平で最も活動の激しい地獄谷の南東端にあります。ここは水蒸気を伴わず硫化水素などの有毒ガスを噴出するため多くの動物が死んでいるそうです。

日の没りしのちのあかりに河の上の古生層岩
ただしるじろし 鹿兒島寿蔵「潮汐」

これは長瀨へ行って作った歌だそうです。最近の研究では長瀨で見られる三波川変成帯は中生代のものと言われています。鹿兒島寿蔵が長瀨を訪ねた当時は古生層と説明されたのでしょう。もし当時、中生層だといわれていたら、コセイソウガンは7音ですが、チュウセイソウガンは8音になり、音の感じも変わってきます。また、恐竜の時代である中生代では、にぎやかな先入観があって日が暮れて人影もまばらになった長瀨の静かなイメージとは遠くなって

しまうかも知れません。そうするとひょっとしたら、この作品は生まれていなかったかも知れません。

沼のうへ重く苦しき隆起あり泥火山にて
泥塔をなす (八幡平) 佐藤佐太郎「群丘」

この短歌には八幡平という詞書きがあります。詠われている泥火山は後生掛温泉にあるものです。泥火山は異常な高間隙水圧を持った泥が地下から上昇し、上位層を押し上げてドーム状の構造を作ったものです。ガスを伴って噴出することも多く、地下の硬い岩石を礫や岩塊として持ち上げてくることも知られています。

地の火のわきたつ響き波のごときこゆる山に
のぼり近づく

こもりたる火の音きこゆこの山のいぶきは天に
立ちのぼりつつ 佐藤佐太郎「立房」

これは昭和神山を作者が昭和21年に訪ねた時の歌です。北海道有珠山東麓部に1943年から1945年の活動で生じた屋根山と熔岩円頂丘を指します。熔岩の粘性が大きいと四方へ広がらず火口の上に盛り上がりドーム状の丘を形成します。ここで作者は足下にマグマの活動を感じて「地の火のわきたつ響き」「こもりたる火の音きこゆ」と表現しました。活動後まもない昭和神山に実際に登った作者だからこそ(佐藤佐太郎が非凡な歌人であることは当然として)出てきた表現だと思えます。

作者紹介

太田 水穂：明治9年長野県生まれ、昭和30年没。
生方たつ糸：明治38年三重県生まれ、平成11年没。
島田 修二：昭和3年神奈川県生まれ。
鹿兒島寿蔵：明治31年福岡県生まれ、昭和57年没。
佐藤佐太郎：明治42年宮城県生まれ、昭和62年没。

森尻理恵(産総研 地球科学情報研究部門 地球物理
情報研究グループ)